

## 仲秋の名月

高田 友

舊曆に據れば、満月を迎ふるは、通常毎月十五日の夜なり。而して、八月の満月を「仲秋（中秋）の名月」と讚たたふるあり。

「仲秋」とは八月の異名にして、且つ、「中秋」は分きて八月十五日を指す。

舊曆の秋は七月より九月なれば、七月を「孟秋」、八月を「仲秋」、九月を「季秋」と呼ぶ。梶原景季の如く、「季」を「すゑ」と訓む、宜なるかなと豈あ感嘆せられであるべけん。而して、八月十五日は正しく秋のほぼ九十日の中な日ひ（なかび）なり。

今年（實は四年前平成二十五年）、舊曆八月十五日は新曆の九月十九日に該あれり。

翌日、某新聞紙に、名月を褒むるの記事ありて、曰く、「今年は幸ひにして、十五日の夜に仲秋の名月現はれたり。然れども、次に舊曆八月十五日の満月を見るは八年の後のことなるべし。寂しからずや」と。

異なる事を承うけたまはる矣かな。こはいかに、何の謂いひぞや。

古來、皇國の人、満月を愛めで來れり。就な中なかんちゆう、舊曆八月十五日は、炎暑果てて爽快の候となり、大氣中に水蒸氣尠すくきがゆゑに空澄み渡る。此に仍よりて、月麗しく、満月の中の華と言ふべし。また忘るべからざるは、夏の満月は南中したりといへども低く地平にかかるの儀なり。秋を迎へてやうやく高度上り、中空の見事なる圓盤とこそはなりたりけれ。冬の満月は更に高く、なほも壯麗といふべけれど、己んぬるかな、寒中月見の風流を解する人多からずして忘却せらる。月と雪との名ぞ惜しきと言ふべし。南蠻紅毛の人も同じ思ひありと見え、收穫の秋の満月とて、harvest moon の名あり。

満月の十四日もしくは十六日に移るふあれば、日本人すなはちこれを慮しん外の事と爲す。名月は十五日に訪るるなくんば、名月と仰ぐに足らずと思ひたるらん。

空の月は、曆の月の深まるにつれて齡よを加ふ。太陽、月、地球の順に並びたるときには、月は日輪に照されたる面を地球に向けざるによりて、世の人、これを見ること能はず。このとき、月齡は0にして、「朔しやく（さく・ついたち＝月立）」と言ふ。

太陽、地球、月の順に並びたるときには、月は満面を照し出ださるるによりて、闕かくることなき麗容を示す。これ月齡十五日の月にて、「望ぼう（ぼう・もち）」と稱す。

月齡の整数に限らざること、言を俟またず。今、縁に座りて團子だんじを啖くふ間にも月は齡を加へてあり。たまたま十五日の夜八時に全まき満月を迎へたりと思ひ候へ。全まき満月とは月齡15.0000の月にして、一瞬にして生じ、一瞬にして消え行く泡うたかたの類なり。次の瞬間には、月齡15.0001となりて、もはや全まき満月にはあらず。既に闕かけ始めたるなり。

而して、今を去ること二時間、午後六時に東に昇り來たりし月は、月齡ほぼ14.9の月にして、これまた全まき満月にはあざりき。中空に昇るにつれて、齡を加へたるなり。

古典文學には、満月の十四日もしくは十六日に昇り來れるを記したるもの少なからず。

満月より満月までに要する時間はほぼ29.5日なり。これによりて、舊曆は一箇月を二十九日または三十日に定めてあり。然るに、この

29.5に端數の付するありて、微妙なるタイムラグを生ず。しかるがゆゑに、舊曆と月齡の符合せざる

こと、なきにしもあらず。十四日の満月、十六日の満月を見るに至れる所以なり。

さはさりながら、此の如き現象は稀にして、通常は、満月は十五日と定まりたり。

然而、右記の新聞記事に「八年を経ざれば十五日の満月を再び見ること能はず」とあるは、そもそも何ぞや。今より後、七年に亙りて、

舊曆八月の満月は、十四日または十六日に現はるとの意ならんには、過てりと言はざるべからず。

苟くも新聞記事の、さほどの明確なる過誤を犯すあらんや。摩訶不思議のことなり。あるいは我が誤解ならずやと思ひて、推理に推理を重ねたる結果、左の如き結論に達したり。

月齡はその面を見れば明らかなり。馬の齡は齒に由りて分別せらる。月の齡一目瞭然たること、また此の如し。

月面の何割何分を太陽に照されてありやを確認致せば、今日の月の齡を斷言するを得。但し、月の出現せざるときには、確認するに由なきは論を俟たず。

春分秋分に近き満月は、ほぼ夕刻六時に昇りて、朝六時に没す。満月は、太陽より見て、正しく地球の裏側に存すればなり。

今、月齡とは、地球のいづこの地より見んとも變ることなきを忘るべからず。

満月に近き月は、昼の間は地球の裏側に隠れてあり。その間に月齡150に達したる場合には、日本にある人は、その瞬間を見ることを得ず。たとへば月齡150になりてやうやく地平線より姿を現す。このとき、或いは人ありて言はん。「今日は全き満月を見る能はざりき」と。

此に因りて是を見れば、上記の新聞記事は、「舊曆八月十五日の夜に再び『全き満月』を見るは八年先のことなり」と言へるにあらずやとぞ思はるる。

さらに注意すべきのことあり。

本朝震旦の舊曆に於ては、日付の變更の生ずるは深更にあらずして、天明なり。

假に、今日が舊曆二月十五日にして、新曆の三月二十日に該ると思ひ做し候へ。新曆三月二十日は午後十二時に終り、その時より三月二十一日始まる。然れども、舊曆二月十五日は子の刻に終るには非ず。拂曉卯の刻に至り、やうやく日付變りて、十六日を迎ふ。

この新聞記事の筆者、若しくは其の参照したる天文學者は、この二つの曆のかかる齟齬を混同したるに非ずや。右の例によれば、舊曆二月十五日の午後十二時を過ぎてより後に月齡150に達したる月を、十六日の満月と看做したるなるべし。舊曆に従へば、これは十五日の満月、何爲率爾の責を免るを得ん。

あるいは、深夜の月は見る人なきによりて、除外したりとも察せらる。

我が推測に誤りなくんば、新聞記事の筆者は、「十五日の夜の仲秋の名月」を「十五日の午後六時より午後十二時の間に月齡150に達したる月」と定義したるものと思はる。

これによりて、十五日の満月の現はれ得る時間帯は六時間となり、二十四時間より四分の一に減じたり。日本の傳統的なる「十五日の満月」と比較して、その出現する確率のかくも低下したるなり。今、漸くにして、彼の筆者の言はんとする所を理解するを得たり。出現の確率四分の一となれば、七年に亙

りてその出現せざるごと、異とするに足らず。

新聞記事の筆者の過誤を犯したりや否やは一概に言ふを得ざらん。然りと雖も、讀者の理解に供すべき配慮の足らざりしを難ずることを得べし。

(平成二十九年十月十五日受附)